

グローバル化時代の日本学研究

—中国の日本文化研究を中心に—

北京外国語大学
北京日本学研究センター
潘 蕾

要旨

中国における日本語教育は 1972 年の中日国交正常化を機にブームが訪れた。その動きを受けて、1980 年に中国の教育部と日本の国際交流基金の協力により在中国日本語教師研修班(通称「太平学校」)が設立され、日本語教師の研修及び日本語教育事業が進められた。以来、中国各地に日本語教育機関が相次いで設置され、国際交流基金の統計によれば、中国の日本語教育機関が 1993 年の 1229 機構から 2015 年の 2115 機構に倍増し、日本語学習者数も 953228 人にのぼり、そのうち 65.6%の学習者が高等教育機関で教育を受けている。日本語教育の普及に伴い、日本の経済・社会・政治・文化に対する学習ないし研究の需要が高まり、また、社会全体の高学歴志向により、大学院進学希望者が急増しているため、ここ数年大学院の設置が相次ぎ、日本研究ができる大学は修士課程では 90 機関、博士課程では 20 機関以上もある。上記機関では日本文化の教育・研究が盛んに行われ、王宝平氏の調査では、1998 年から 2015 年まで、中国で出版されている日本研究著書の中に書名に「日本文化」が含まれたものだけでも 52 冊に上り、日本人が書いた日本文化の著書も 22 冊翻訳されている。この意味では、過去 30 年の中国は日本文化研究の黄金時代を迎えていたと言えよう。とは言え、グローバル化が一層進むと予想される 10 年後、20 年後に目を向けると、研究の蓄積が未だに浅い中国の日本文化研究界に課せられた課題が多岐にわたっているとわがざるをえない。本稿は、中国における日本文化研究の歴史を振り返り、日本文化研究者が今直面している問題を分析し、今後いかに世界の日本文化研究者と協力しながら中国 30 余年来の研究蓄積を継承・発展させていくべきかを検討するものである。

主要参考文献

- ・高増杰《日本文化研究面临的挑战与机遇》(《日本学刊》1997 年第 2 期)
- ・王宝平「「失われた 20 年」における中国の日本研究と今後の可能性」(瀧井一博／編「失われた 20 年と日本研究のこれから*失われた 20 年と日本社会の変容」海外シンポジウム 2015 日文研・ハーヴァード報告書、国際交流基金、2017 年 3 月 31 日)
- ・国際交流基金「日本語教育 国・地域別情報」

<http://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/index.html>